



(1) 多様なニーズに応える教育活動を実現する新しい施設

(ア) 交流軸とシンボル軸による空間構成

敷地が南北に分かれており、北敷地のグランドから南敷地の体育館棟、校舎棟と生徒の活動の流れとなる南北方向に交流軸とし、それに直交する東西方向に正門、玄関、メモリアルギャラリー、交流ホール、国際交流ルームへとつながるシンボル軸とした空間構成とする。

(イ) 御所の緑をとりこむ

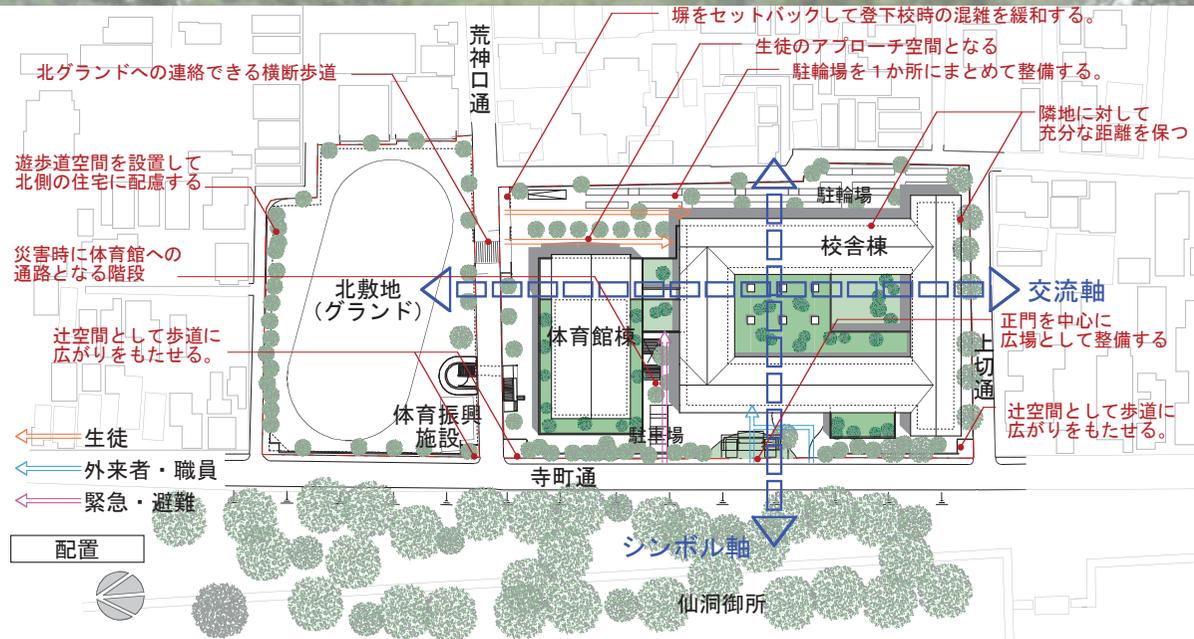
キャンパスが狭隘のため寺町に相對する御所の緑をキャンパスに取り込んだイメージとする。寺町側は九条家の門を両側の塀とともに残しながら植栽帯として御所の緑と連続する効果を作る。

(ウ) 明快な動線計画

生徒のアプローチはグランドと結ぶ荒神口通からとし、職員や外来者は寺町通からとして明確に区分する。それぞれにはアプローチ広場と正面広場を設け人の流れを受け止める空間を作る。

(エ) 周辺に配慮した配置計画

隣地に対して建物を十分に距離を保ち、周囲の厚い植栽により音楽室や体育館の騒音をやわらげる。寺町通と荒神口通の交差点には事故防止のために辻を設置し、安全な交差点とする。グランド北側には植栽帯のある遊歩道を設け、騒音等から北側の住宅地を守る計画とする。



(オ) 明確でわかりやすいゾーニング

建物は大きく2つに分かれる。南側の校舎棟と北側の体育館棟である。校舎棟は中庭と交流ホールを囲むように、南には普通教室、東は特別教室、西は図書館、管理諸室が機能的に配置されている。どの場所でも位置を確認できる分かり易い平面とする。

(カ) コンパクトな平面

ループ状の廊下をもつコンパクトな平面とする。それぞれの機能の関係を考慮して、学年やクラスを越えて多様な学習が出来る配置とする。

(キ) 地域に開かれた学校

玄関横に設置したメモリアルギャラリーを中心に図書館や和室・茶室は外部への開放を前提とする。また昇降口の近くにある食堂も開放の可能なものとして計画する。

(ク) 屋内広場ともなる交流ホール

交流ホールは講堂・集会・展示など多目的なイベント空間とし、通常は自由な活動の屋内広場である。交流ホールを中心にメモリアルギャラリー、和室、図書室、国際交流ルームが配置され、多様な活動を支える空間となる。イベント時は中庭部分にはカーテンを降ろし、その他も暗転できる工夫をし、ホールとしての機能を充たす。

(ケ) 屋外を利用した活動空間

狭い敷地の中でも接地性が高くなるように屋外との関係を考慮して、中庭や屋上庭園を設ける。中庭は普通教室にも近く、休憩や散策がしやすい空間とする。3階の屋上庭園は特別教室に取り囲まれた空間で、外で楽器を演奏、試食など学習の延長で利用できる。

(コ) 時代の変化に対応できる校舎棟

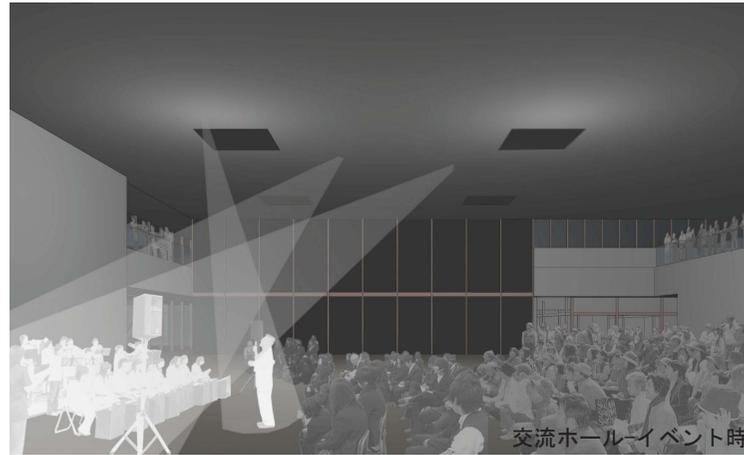
空間のモジュールを統一し、将来の空間の変化に容易に対応できるよう耐震壁の配置に注意する。設備更新が容易になるよう設備シャフトを窓側とすることも検討する。

(サ) 地下にアリーナを設置した体育館

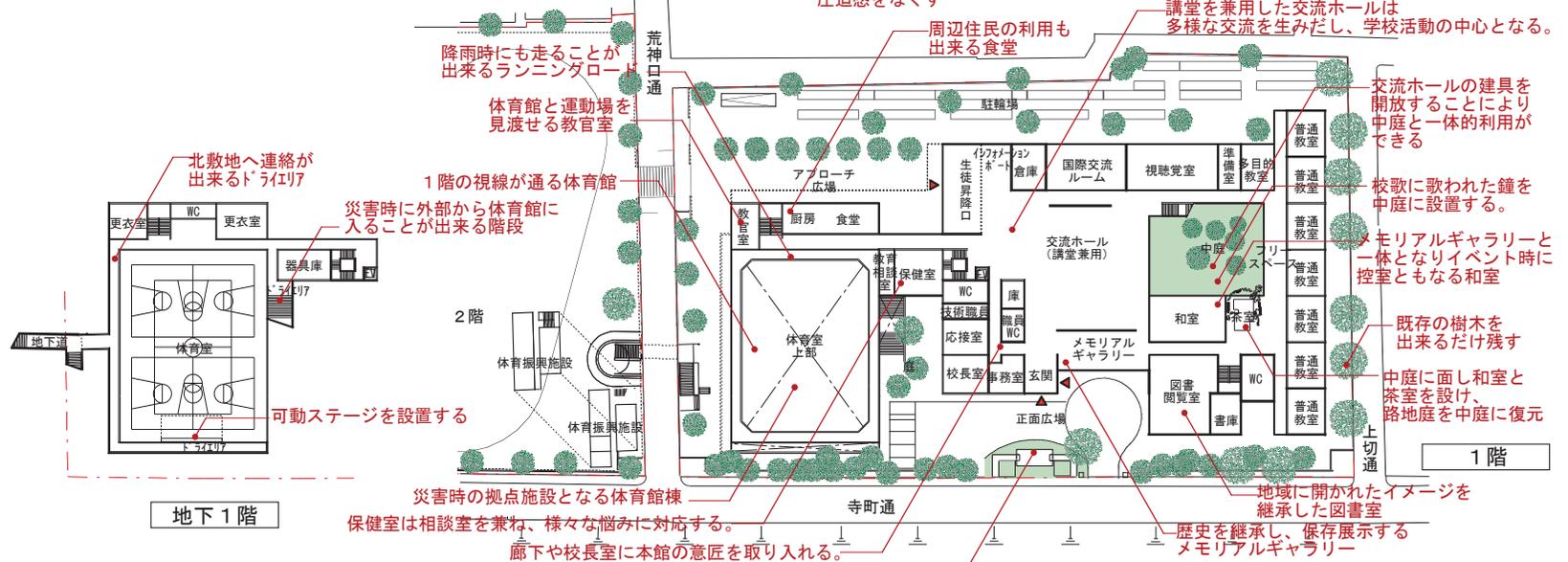
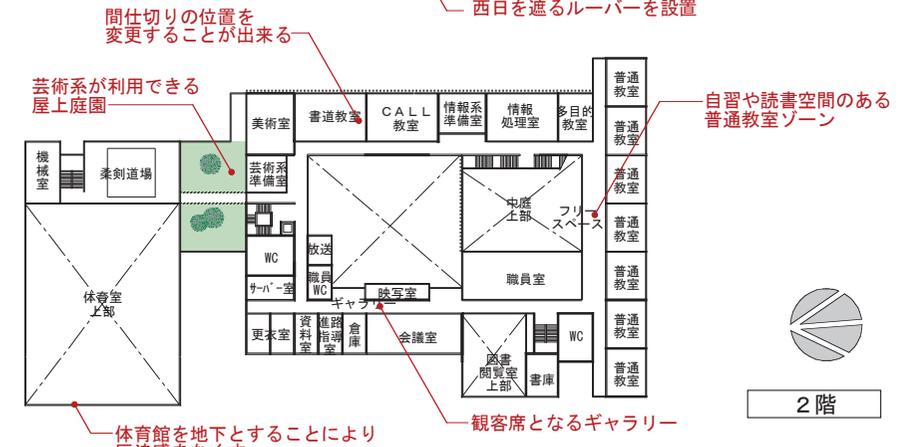
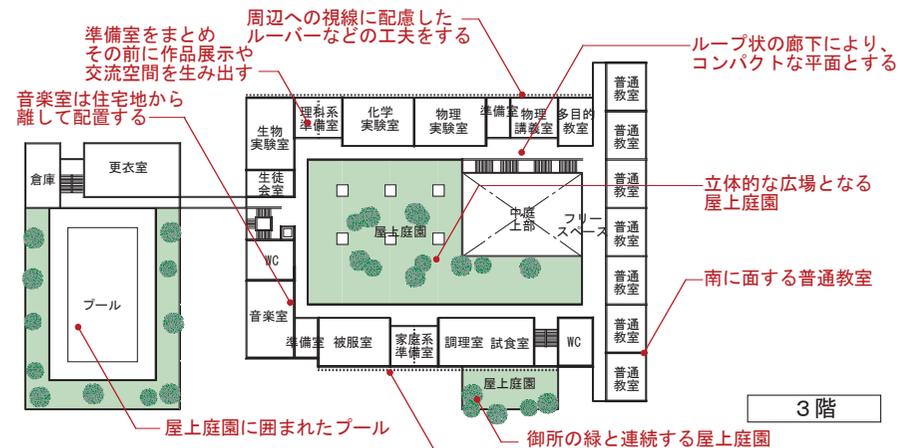
体育館棟は地下にアリーナ、3階にプールの構成とした。地下にアリーナとしたことにより外部からアリーナの様子を見ることが出来る。また大きくなりがちな体育館のボリュームも小さくなり、周辺へ配慮したものとなる。



中庭とつながる交流ホール



交流ホールイベント時



(シ) ITC整備

ITC整備により、構内情報システムの統合を図り、教育・行事支援・業務管理・環境制御などの効率化を図ることが目的である。生徒の生活記録・教育評価、読書記録などのプライバシーに関する記録等の扱いには注意を要する。

(2) 歴史的・文化的価値の継承

一歴史と伝統を受け継ぎ、新しい時代に対応

(ア) 歴史を継承するメモリアルギャラリー

これまでの長い歴史や収集品を公開展示するための空間となる。図書館と近接し、生徒への啓蒙だけでなく、外部にも公開する。

(イ) 旧九条家の遺構の継承

正門は現状の位置に残し、和室や茶室はメモリアルギャラリーに隣接して設置し、一体的な利用が可能となる。茶室は建物内に再現する。中庭に飛び石やつくばいを復元し外部ととも利用できる。

(ウ) 緑を受け継ぐ中庭や屋上庭園

既存の緑を極力残しながら、緑豊かな現在のイメージを中庭や屋上庭園で継承し、御所の緑と連続させる。これまでの記念樹等を中庭やアプローチ広場に移植する。

(エ) 御所の景観に配慮した新たな屋根のデザイン

御所の景観に配慮し、これからの鴨沂を象徴するような屋根のデザインを検討する。

(オ) 斬新なプール

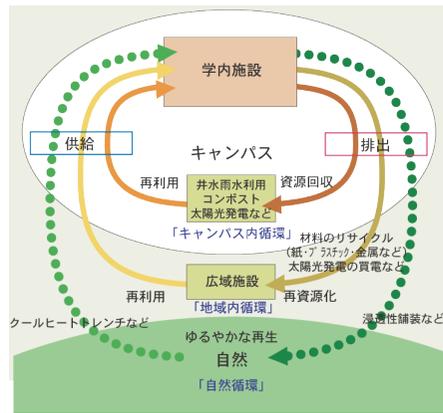
体育館上部のプールは透過性の屋根として、周辺に対する圧迫感を低減し、明るく清新な当初のイメージを継承する。

(カ) 既存校舎の雰囲気を残す

外観はアールデコのデザインを参照しながら新たな鴨沂のイメージを表現する。内部では本館の廊下の意匠を1階校長室前の廊下に復旧し、校長室や応接室の意匠も本館のイメージを取入れたデザインとする。校歌に歌われた鐘を中庭に設置する。



■ITC整備による情報システムの統合化



■循環システムのイメージ

(3) 環境・災害対応、安心・安全な教育環境

(ア) ゼロエミッションを視野に入れた循環型社会へ

左図に示すようにキャンパス、地域社会、自然界の中でエネルギー・物・水・植物などの循環システムを構築する。

(イ) 環境への配慮

中庭や屋上庭園により自然の光と風を積極的に取り入れる。屋根の上部に太陽光発電を設置し、雨水をピットに貯めて散水やトイレの洗浄水に利用する。またピットを利用したクールヒートトレンチにより空気を取り込み共用部を快適な環境とする。

(ウ) 最適な設備システムの構築

照明は積極的にLED照明を検討し、トイレなど共用部は人感センサー式とする。空調はガス熱源としたGHPを採用する。また変電設備に高効率のトランスを採用する。プールでは災害に強い中圧ガスによるコ・ジェネシステムを採用し、キュービクルへの給電も可能なシステムを組む。

(エ) 災害対応

緊急時の地域の災害拠点として、一時的には交流ホールを用い、長期的には体育館を避難場所として、食堂や保健室と一体となって避難者を支える体制を取る。これにより学校の早期再開も可能となる。

(オ) 堅牢な構造

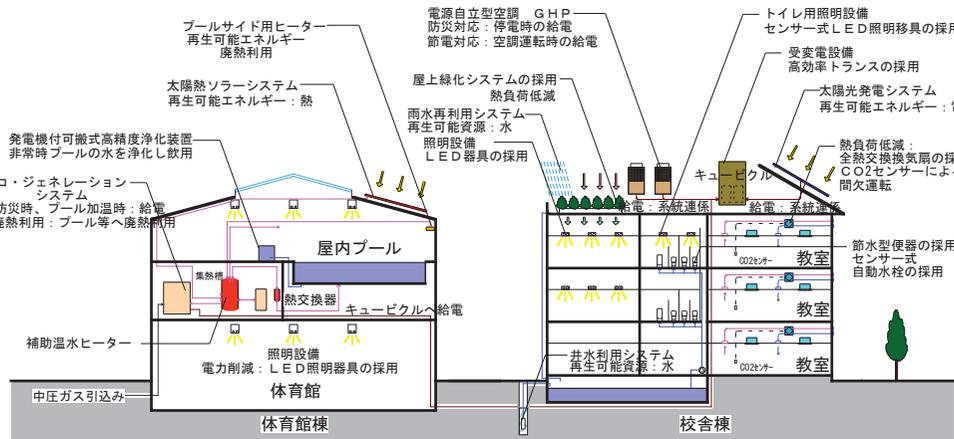
標準スパンや大きなスパンが混在しており、それぞれにあった最適な構造を選択する。重要度係数1.25以上の耐震安全性を確保しつつ、サーバー室など高い耐震性が要求される諸室には、装置免震、床免震の採用を検討する。

(カ) ユニバーサルデザイン

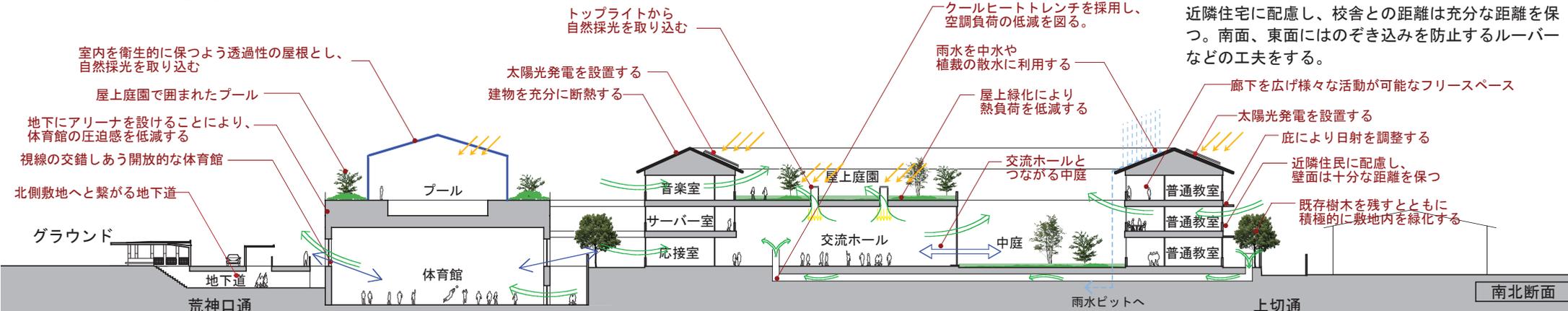
車椅子でどこでも行けることを基本とし、地階から3階までEVでつなぐ。北グランドへは横断歩道を設置し、必要に応じて信号を設ける。その他多目的便所や障害者駐車場を適所に設置する。

(キ) 周辺環境への配慮

近隣住宅に配慮し、校舎との距離は十分な距離を保つ。南面、東面にはのぞき込みを防止するルーバーなどの工夫をする。



■省エネ省資源概略図



南北断面